あじさい

第 56 号

2012 年 1 月 21 日発行

発行責任者　大森克成
〒921-8845
石川県野々市市太平寺２－９
TEL/FAX (076) 248－6303
E-mail/aihuru@po4.nsk.ne.jp

今年はかんぽの郷尾口で
合宿したよ～

十一月五日、六日、かんぽの郷・白山尾口で合宿を行ないました。

一日目の講演会の講師には阿部厚仁先生（全難言協事務局長）を東京からお招きし、「聞こえにくいってどういうこと？　きこえの教室の実践から」と題してお話していただき、ワークショップも取り入れた楽しい講演会でした。

二日目はプラバン作りとバルーンアートに挑戦。アンパンマンやドラえもん、似顔絵などをプラバンに描いてペンダントにしたりして、素敵なお土産ができました。

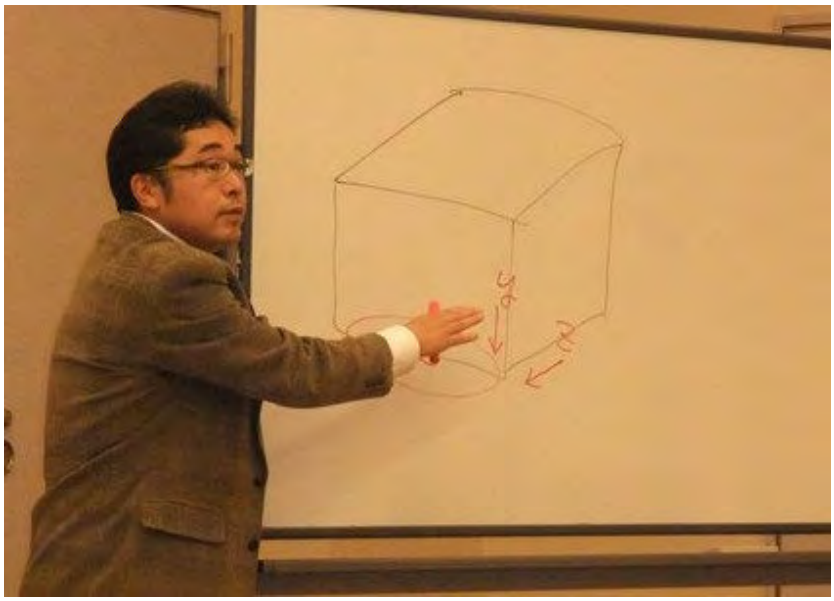
お父さん達が汗をかきながらオーブントースターでプラバンを焼いてくれました。バルーンアートはお母さん達の出番。でも何度も割れた音も！

親子合宿に参加して

松井　貴子

十一月五日(土)～六日(日)、白山尾口かんぽの郷へ行って来ました。自宅を出発する頃は晴れだったのに白山近くになるとポツポツ雨が降って来ました。紅葉を楽しみに散策しようと思っていたので残念でした。

バスが到着するとニコニコとほほ笑む大森会長がお出迎



えして下さいました。本当は、金沢駅からバスに同乗の阿部厚仁先生のお出迎えです。お二人は開会式迄の一時間余りを立ち話で過ごし、ソファーで寛ぐ私とは正反対でした。

開会式が終わり、楽しみにしていた講演会。講師は阿部厚仁先生です。（東京烏山北小学校ことばの教室担当、全難言協事務局長）

四、五年前に先生の講演会に行く機会があり何故か「また、会える。」「また、会いたい。」と感じたとても魅力的な先生です。今回もその魅力は健在。きこえとことばの教室に関わって二八年だそうです。

印象に残ったお話がありました。箱を書かれ、横をX、縦をZ、高さをYと表し、Xは子どもが持つ困難さやつまずき、Zは周りの反応を見て自分を悲観や否定する気持ち、Yは困難さを持った子が上手くいかなかった時の周りの反応を表わしています。先生の仕事は、Yの高さを0に近づける事とお話されました。地域の学校に通っている難聴児にとっては、とても重要な支援です。私が学校に願っている事でした。

『幼い時から難聴の子は、どれだけ、自分が聞こえにくいのかを知らない。』『自己有能感』『お父さんに子どもの良い所を言ってもらう。』等、他ゲームを四つ…。

とても有意義な講演会でした。

保育に預けていた娘の菜々子は、年長者という意識があってか小さい子のお世話を「お姉ちゃんが〇〇してあげる。」とがんばっていた様でした。普段やりなれていないからか途中居眠りをして充電したと話してくれました。

就寝までの時間は、年齢が近い女の子が集まり合宿恒例の怖い話をして盛り上がった様です。朝、布団をずらすと長い髪がどっさっと落ちていてビックリしました。どうやら、かつらを仕込む程の本格的な怖い話だった様です。

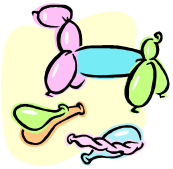
恒例と言えば、夜の交流会。一時過ぎまで続きました。二名のお父さんが私の前に座っておられました。上の子の子育てを反省し、下の子には勉強より人と繋がることを大切に育てていると、園への行事は積極的に参加している。もう一人の方は、小学校へ顔を出すのは、子どもの話を分かりたいからと話されました。お二人とも素敵なお父さんですよね。お二人の姿勢を見習わなくてはと思います。

阿部先生とは、来年富山で講演会（通級指導教室の役割りについて）を行うと約束し、私にとって大収穫の交流会でした。

二日目は、体験学習。娘は何回かプラバン作りを経験しています。今回は満足な出来らしく帰宅後、家族に自慢していました。バルーンアートでは、風船の割れる恐怖と闘いながら、なんとかネズミを作り終えました。

閉会式。何名か合宿の感想を発表しました。「普段の生活の中では聴覚障害を持った人には出会えないが、合宿で出会えて嬉しかった。」と初参加の子が発表しました。菜々子も同じです。地域の学校では、自分だけが聞こえない聞こえにくい事が多く、常に緊張感を持って過ごしていますし不安も多いと思います。孤独感も私の想像を超えるものだと思います。同じ障害を持った仲間が集える機会が増えたら日頃のストレスも解消されるかも知れないですね。そう考えると合宿には大きな役割があるのではと思います。

お世話頂いた、大森会長、大森夫人、役員の方々、阿部先生、保育を担当してくださった南先生、山岸先生、保育士さん、補聴器店の石川さん、合宿に参加の親御さん、お友達、ありがとうございました。皆さんの御蔭で二日間楽しく過ごす事が出来ました。



親子合宿に参加して

三田ひとみ

今回の合宿は、私どもは三回目の参加でした。

一回目は難聴と判って間もない頃でしたので、先輩のお父さんお母さん方に勇気をたくさんもらいました。

二回目は、二日目だけの参加でしたが、楽器の演奏を難聴児に贈り届けるというチャレンジでもありました。人に感動を与えられる演奏を心がけてきましたが、正直、難聴児に伝わるのだろうか…と不安でした。でも、「知っとる曲や！」と目をキラキラさせている子ども達を見て、とても嬉しかったことが昨日のことのように思い出されます。

そして三回目の今回は、親の会の存在のありがたさを、改めて感じさせるものでした。

一日目の阿部先生の講演は、ゲームあり笑いありでとても楽しくあっという間の時間でした。身体を使ったゲームでは、実際に声を出さずに周りの人とコミュニケーションをとり、行動しました。すると、短時間でしたが、次第に皆が周りの人と助け合いながら行動していき、だんだんと仲間意識も芽生えてきました。そして達成（ゲームが成立）したときは、とてもすがすがしい気持ちになりました。今回のゲームで、難聴者の気持ちになれたし聞こえなくても自分の存在をちゃんと示し、皆が助け合うことで喜びや楽しい時間を共有することができるのだと実感しました。

お話では、親に自分の子どもの欠点をあげて下さいと言うと、いくつも書けるが、良い点をと言うとなかなかあげられないものであるとのことでした。しかしちょっと見方を変えると、欠点も良い点に換えられるのだと解りました。「あなたらしくていいね」と素直に言えるような誉める子育てができるようになりたいものです。

先生がおっしゃられた中で印象に残ったことは、「私達教師が言う言葉より、今まで難聴児を育ててこられたお父さんお母さんが言う一言が、後輩のお父さんお母さんのどれだけ力になることか」といった内容でした。親は悩みや不安を相談できる所や、愚痴れる所が必要であり、子ども達も親と同じだと思います。同じ悩みや苦手さを持つ仲間に安心して自分を出せる場があることは、子どもが成長する上でも大事なことだなあと改めて感じました。

二日目のプラバン作りでも生き生きと思い思いの絵を描き、楽しそうにはしゃぐ子ども達を見ていると、親も嬉しいし、もっと多くの人にこのような合宿に参加してほしいな～と思いました。そして、先代の頑張ってくださった方々がいるから今の自分達が恩恵を受けられているのであり、そのことを忘れてはいけないと感じました。

最後になりましたが、準備して下さった方々のお蔭で、親子共々とても楽しく過ごすことができました。この場を借りてお礼申し上げます。

合宿に参加した保育士の感想から

★子ども達は障害を感じさせないくらい明るくて元気いい子が多いと思った。今まで体験したことのない事だったので、最初は戸惑いもあったが子どもたちの方から話し掛けてきてくれてとても嬉しかった。

★手話や言葉で一生懸命伝えようとしてくれていたのにわからなくて申し訳ないことをした。話してる言葉が聞き取れず理解してあげられなかったのがつらかった。

★部屋に三時間ずっと入っているのは、小さい子が特に苦痛そうだった。途中で飽きて、部屋の外に出たがる子が何人もいた。

★年齢が幅広くてうまく遊べるか不安だったが、小学生の子が下の子の面倒をみてくれてあまり手がかからなかった。

★もしまた機会があれば、少しでも手話を勉強して歩み寄れるようにしたいです。ありがとうございました。

金沢地区教育相談会

七月一〇日、金沢市の教育プラザ富樫で、毎年恒例になっている今年度第一回目の「教育相談会」を開催し、たくさんの親子が相談に訪れました。

相談に当っていただいている先生は、金沢市明成小学校きこえの教室の特別支援教育コーディネーター南尚美先生はじめ特別支援教室の先生方、石川県立ろう学校や言語聴覚士の先生方などです。

今年は、長野県から安川健治先生（全難言協二〇一〇年長野大会事務局長）に来ていただき、前日の講演会に引き続き、教育相談会にも参加していただきました。

今回の相談会でも先生方との相談のあとに、後援していただいているさまざまな親の会の保護者と話をしてもらうということを大きな柱として取り組みました。パルの会、アスペの会、エルデの会、難聴児を持つ親の会などの会員がスタッフとして参加してくれました。相談に来た不安げな親の話に熱心に耳を傾け、体験を話したり家庭での様子などについての話をしていました。

能登地区教育相談会

十一月二十七日、能登地区教育相談会を穴水町のとふれあい文化センターで行ないました。今回は東京から全難言協事務局次長の桜沢浩人先生に来ていただきました。

相談会の受け入れ態勢も金沢大学の小林宏明先生、上農肇臨床心理士をはじめ言語聴覚

士の先生方とことばの教室の先生方、ろう学校の先生方そして保育士と万全で臨みました。おかげで多くの相談者が訪れました。

親の会主催の相談会の特徴のひとつに、先生から相談を受ける前に保育室で既に相談が始まっているということです。「診察室」のような相談室では子どもも緊張したりして、普段の状態が判りにくい場合があります。そこで、順番を待っているような感じでそれとなく先生が一緒におもちゃで遊んでいて、頃合を見て「さあ、部屋に行きましょうか？」となります。

また、ことばの教室の先生方や若い言語聴覚士の先生方にとって、相談の場に同席する事によって大学の先生や臨床心理士の先生がどのように子どもとの接点を持ち始めるのかを、目の当たりにすることができ大変勉強になったと好評です。

石川県難聴児を持つ親の会
記念講演会

六月十二日(土)、十三日(日)石川県難聴児を持つ親の会の記念講演会、個別相談会が金沢市の教育プラザ富樫で行なわれ、昨年に引き続き東京の田中美郷教育研究所ノーサイドクリニックの言語聴覚士芦野聡子先生が講演されました。午前中は学校の先生方などを対象に、また午後からは保護者を対象に講演をされました。

また、十三日は個別相談会が行なわれ、ノーサイドへの個別電話相談を申し込む会員が増えました。

ノーサイドには難聴の勉強をするために全国のろう学校の先生方や言語聴覚士が研修を受けに来ており、石川県内の先生方も参加しています。

研修会

「発達障害へのアプローチ」

子どものことばが見えてくる

六月二十六日、保育士、幼稚園教諭、保健師、小中学校の先生、言語聴覚士、各専門分野の方々、学生等を対象とした発達障害についての研修会を金沢市教育プラザ富樫で開催しました。

今回の研修会は、これまで本会で行なってきた相談会で、幼稚園、保育園の先生方が「身近なところでの発達障害児の勉強をしたい」という要望に応えた形で、今年度初めて取り組みました。

講師は石川県言語聴覚士会に依頼し、北陸学院大学の大井佳子先生と言語聴覚士の田中早苗先生に、午前午後に渡っての研修をお願いしました。参加者は熱心にメモを取っていました。

幼稚園・保育園では発達障害児の対応の仕方への要望が増えており、本会としても継続を検討しています。

NPO法人全国ことばを育む会

全国大会岡山大会

八月六日（土）七日（日）と、NPO法人全国ことばを育む会の全国大会が岡山県で開かれ、本会から大森会長と野々市町菅原小学校特別支援教室の松本賢二先生が参加しました。

記念講演会では、肥後功一先生が「育ち合う心を求めて―ことばを育む意味を考える」と題して講演されました。

子どもが自信を持てるのは、何かを達成したときと、居場所があるということ…障がいのある子どもが、ここにいていいんだ、この世の中も案外捨てたもんじゃないな、と思えるようなことばを、私たちがかけ続けることの大切さを感じ取ってきました。

次回は二〇一三年に、親の会発祥の地＝千葉県で行なわれる予定です。

小松加賀地区教育相談会

◎とき　2012年1月29（日）10：00～16：00

◎ところ　小松市第一コミュニティセンター

毎月十一日、御経塚イオン

黄色いレシートを入れて下さい

今年度も本会では野々市市御経塚イオン（旧サティ）の「幸せの黄色いレシートキャンペーン」に応募し、四月からの半年間で売り上げレシートの

一％＝一〇四〇〇円分の商品券の寄贈を受け、おもちゃや文具、相談会用のお茶などと交換しました。

毎月十一日には野々市市の御経塚イオンで買い物をして、黄色いレシートを「石川県ことばを育む親の会」のボックスに入れてください。

ＪＫＡ！

弥彦競輪に行ってきました。

一〇月十四（金）十五（土）に、新潟県弥彦村にあるＪＫＡ・弥彦競輪場へ競輪事業の研修会に三名が参加、競輪車券の買い方等の講習を受けました。

この研修会は、「ＮＰＯ法人全国ことばを育む会」が毎年ＪＫＡから補助金をもらって各県で事業を実施していることから、全国のブロックごとに研修会に参加してきました。新潟県にはことばの親の会がなく、北陸ブロックでは石川県が参加することになっています。

石川言友会

一〇月二十三日、金沢市松ヶ枝福祉館で「いしかわ吃音がある人のつどい」が開催され、会員をはじめ多くの参加者がありました。

講演は「吃音問題とその改善について」と題して金沢大学人間社会研究域学校教育系准教授・小林宏明先生のお話があり、次に言友会会員による体験発表、そして小グループに分かれての懇談と続きました。

福井県から参加した若い父親は、自身も吃音があり、二歳の娘が吃音が始まっており、自身の経験から大変不安を訴えていました。

本会の教育相談会にも毎回相談員として参加していただいている小林先生とも相談しながら、吃音の親の会立ち上げを準備していくことにしています。

はじめの一歩

毎月第二土曜の午前中に金沢市教育プラザ富樫で、難聴児の主に乳幼児を対象とした「はじめの一歩」を開催しています。

新生児聴覚スクリーニングなどで難聴と診断された子どもの両親は、県の委託を受けた専門家グループ「みみずくクラブ」で難聴についての基本的な講習を受けます。その後、紹介された療育機関や教育機関を見学し、自分に合った機関へ通うことになります。

「はじめの一歩」では、「聞き取って話す」ことを目標にして、実際に話しかけの仕方を主に実践しています。何よりも母親支援、頑張っているお母さんを応援しています。毎回たくさんのおもちゃで楽しく遊びながら続けています。

講演会　難聴児のための英語指導

辞書とフォニクスで英語はできる

◎と　き　2012年2月18（日）13：30～16：00
◎ところ　金沢市教育プラザ富樫321号室
◎講　師　白井一夫先生（新潟県立新潟聾学校中学部主事）
◎参加費　１，０００円（会員無料）

「難聴児にとって、英語の学習が難しいとよく言われます。現在、全国の公立小学校では５年生から、英語教育特区の金沢市の小学校では１年生から外国語活動が始まっています。最近の英語の授業は、「聞き慣れる」という学習が重視されており、きこえに問題をかかえる難聴児は、お手上げです。では、どうすれば…。」

親の会で石川県に要望書を提出しました。

平成 23 年 9 月 12 日

石川県知事　谷本正憲様

石川県難聴児を持つ親の会　会長　大森　克成
石川県ことばを育む親の会　会長　大森　克成
石川県医師会　会長　小森　貴
日本耳鼻咽喉科学会石川県地方部会　会長　吉崎　智一
石川県耳鼻咽喉科医会　会長　木下　弘治
石川県言語聴覚士会　会長　勝木　準

中度・軽度難聴の子ども達に、公的支援をお願いします。

日頃より、難聴児をはじめきこえやことばに障がいをもつ子ども達へのご配慮に感謝申し上げます。

さて、現在 70 デシベル未満の軽度・中度の難聴の子ども達は「障害者」に認定されておらず、障害者自立支援法の適用を受けられないため、日常的に装用が必要な補聴器を全額自費で購入、修理をしています。

また、買い替えや学習に必要な補助援助システム（FM 補聴システム）の購入も、10 数万円から 20 数万円と高額なため断念することが多いのが現状です。

聴力は、身体障害者基準に適用しませんが、軽度・中度難聴の子ども達にとっても補聴器の利用は日常生活でのコミュニケーション、学校での学習に欠かすことができません。特に、乳幼児期の言語獲得のために重要な機器であり、また適切な補聴環境がないばかりに、学校生活においては聞き漏らしや聞き間違えがみられ、学習面や友人関係で苦労を強いられることもまた現状です。

また、補聴器はその性能上、軽度・中度難聴の子どもに対しては特にその補聴効率がよいことが示されています。

少なくとも乳幼児期から大学までの就学期間中においては、よりよい環境の中で教育を平等に受けられるような公的支援を要望します。

１．要望事業　　難聴児補聴器購入助成事業

２．目的

身体障害者手帳の交付対象とならない程度の聴覚障がい児に対して言語の習得やコミュニケーション力の向上を促進するため、補聴器の購入費用の一部を助成し、聴覚障がい児の福祉の増進を図ることを目的とする。

３.実施主体

市町村

４.助成対象

次の要件をいずれも満たす、聴覚障がい児を対象とする。

① 石川県内に居住すること

② 両耳の聴力レベルが原則として 30 デシベル以上 70 デシベル未満で、身体障害者手帳の交付の対象とならないこと（手帳交付の対象に対しては、市町村が支援事業を実施している）
ただし、医師が装用の必要性を認めた場合は、30 デシベル未満についても対象とする。

③ 補聴器の装用により、言語習得等一定の効果が期待できると医師が判断するもの。

５.助成金額

補聴器購入費用（本体・電池・イヤモールド）のうち、３分の１に相当する額を県が市町村に交付する（千円未満端数切り捨て）。

なお、市町村は、県補助金額に独自にかさ上げして、助成することができる。

ただし、修理および電池交換、イヤモールドの交換のみは対象としない。

また、保護者の属する住民基本台帳での世帯の中に、市町村民税所得割額が 46 万以上のものがいる場合は対象外とする。（現行の国の助成制度と同様）

生活保護受給世帯については、生活保護法による対応を優先する。

教室だより

加賀市立片山津小学校
通級指導教室　まなびの教室

「あおぞら」

佐々木由里恵

加賀市では、平成二十一年、まなびの教室『あおぞら』が、通常学級で特別支援を必要とする児童のために新設されました。私は、平成十七年度までことばの教室の担当経験がありましたが、離れていた三年間は、特別支援教育、通級指導教室の転換期、指導の対象や内容が大きく変わった時期でした。県特研に行き、「LD・ADHD等」という教室名を耳にし、自分が浦島太郎になった気がしました。

まず、私自身の中で「まなびの教室」の役割を再確認し、「何をするところ？」なのか明らかにする必要がありました。

「ことばの教室」の場合はまわりや本人が通級理由を理解しやすかったのですが、「まなびの教室」の場合は、どう言ったら本人を含めまわりの児童にも『あおぞら』が理解できるのか、とても配慮のいる作業です。彼らだけではありません。新しく校内に設置される訳なので、校内の児童、先生方にも未知の分野です。

そこで、他校の実践等を参考にしつつ、児童用の『あおぞら紹介パンフレット』を作り『あおぞら』の四つの勉強をまとめてみました。

入口の紹介リーフレットと教室のキャラクター

① お話やコミュニケーションの練習
② スピード勉強とゆっくり勉強
③ 学校や社会のルールの勉強
④ 手先や体の動きの練習

これらを、通級児には、最初の通級の時間に説明し、自分自身の理解や得意や苦手なことに目を向けながら、できそうな勉強は何番目かいっしょに考えていきました。

また、校内の児童に、“ズームインあおぞら”と題して、リーフレットを用いながら『あおぞら』についてのQ&Aで教室内の謎解き（仕切りやマジックミラー）や、通級人数（今年度は十六名）、加賀市内全域の小学校から来ていること、どんな勉強（四つの勉強）をしているのか等を紹介する授業をしていきました。同時に、通級児に対するあいさつや配慮についての確認もし、学校中であたたかく通級児を受け入れていく雰囲気ができてきました。

通級児もそれに負けてはいません。登校した時、玄関のインターホンで、とても元気良くあいさつできる子が増えてきました。また、校長室へもあいさつを続けることで、通級担当の私だけでなく、校内のいろいろな先生とのふれあいにもなりました。校長先生から竹の迷路の工作材料を頂いたり、中庭の池に魚を入れたり・・・、教頭先生とこわれたおもちゃのハンダ付け作業をしたり・・・秋の好天の日には片山津温泉のまち探検に出かけ、足湯や柴山潟の浮き御堂観光も経験しました。子ども達は、いつもと違った場所での違った自分見つけができました。

通級児が、在籍する学級で生き生き学習・生活できることは、通級の大きな目標です。そのため、在籍学級で、先のあおぞら理解の授業を行ったり、進学先の中学校を事前に訪問したりしました。どれも在籍校の担任、保護者、特別支援コーディネーターとの連携のもと、通級児の気持ちも尊重し進めなければならない活動でした。

三年間、通級児一人ひとりみな違う背景の中、どれくらいの“心をつなぐ”ことができたか、力が及ばないことばかりですが、今後も通級で元気になれる子が増えるといいなと願っています。